

科目名	保育学特論		副題		
担当者	内藤 知美				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。 2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。				
授業の方法・授業計画					
1	保育のまなざし—教える、教えられる—				
2	子どもか子どもたちかという「問い」				
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち				
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ				
5	保育フィールドの構造と理解				
6	遊びを通した保育（1）事例検討：身体的であること				
7	遊びを通した保育（2）事例検討：共同的、協働的であること				
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか				
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築				
10	保育における対話と同僚性				
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理				
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価				
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい				
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環				
15	まとめ：保育の課題と展望				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	鯨岡峻『保育主体として育てる営み』ミネルヴァ書房, 2010年 佐伯胖編『共感—育ち合う保育のなかで—』ミネルヴァ書房, 2007年				
参考文献	J.レイヴン&E.ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書, 1993年 日本保育学会編『保育学講座Ⅰ保育学とは—問いと成り立ち—』東京大学出版会, 2016年				